第 39 回国際学生セミナー「東アジアを考える」　2012 年 11 月 24 日

「二つのユートピア―ロシア・イスラーム・東アジア」

小松久男（東京外国語大学）

１．イスマイル・ガスプリンスキー(1851-1914）の思想と活動

近代ロシア・ムスリム社会における改革運動の指導者・ジャーナリスト

１）『ロシアのイスラーム』（ロシア語、シンフェロポリ、1881 年）

「ロシアはその内に巨大なムスリム集団をかかえている。しかし、ロシアはアジアの文明化という偉大な使命を標榜しながら、徴税と保安以外ではこのムスリム集団を放置したままであった。ムスリムは貧困と無知にさいなまれ、破滅的な移住も後をたたない。ムスリムとロシア人とは相互の無知と不信のために隔絶されているのである。ロシアの論者はこれをイスラームに内在する他宗教への敵対性で説明しようとするが、問題はイスラームではなく、適切なイスラーム政策が欠如していたことにある。強制的な同化政策は、強固な伝統に支えられたムスリム社会の反発を招くばかりであり、ポーランドの例のように失敗に終わることは目に見えている。有効なのは合衆国やロシア領内のフィンランドのように、民族の平等あるいは自治の原則に立った協同のシステムである。ロシアは、ムスリムが共通の母語（トルコ語）による普通教育を通して現在の無知と偏見から解放され、知的な覚醒をとげることを許容し、支援すべきである。かつて東方に生まれた文明は西方に波及し、いままた東方に反流しようとしている。ロシア人とムスリムは、その最良の前衛となるにちがいない。」

２）新聞『テルジュマン（翻訳者)』の創刊（1883 年）

ロシア・ムスリムの啓蒙・覚醒とトルコ語文章語（共通トルコ語）の普及を目的

トルコ語とロシア語の二言語、300 部から１万部超へ、定期購読料・広告・寄付

「言語、思想、行動における統一」「ボスフォラスの船頭からカシュガルの駱駝引まで」

３）バフチサライに「新方式 usūl-i jadīd 学校」を創設（1884 年）

近代的な初等学校の模範校（教科書・カリキュラム・教室・発声方式など）

革新派（ジャディード）と守旧派（カディーム）との対立・抗争

革新派　対　守旧派　＋　ロシア当局

４）『露東協約』（ロシア語、バフチサライ、1896 年）

「ロシアとイスラーム世界は、ともに東西から深刻な脅威にさらされている。人口の過剰な東方世界は、いずれ移民を先頭に西へ、つまりわれわれに向かって膨張を始めるだろう。無名の小国日本が日清戦争(1894－95 年)に勝利したように、清国もまた急速な発展を遂げる可能性を秘めている。これに対して、西欧列強はロシアとイスラーム諸国の双方に攻撃をかけるのみならず、先の露土戦争（1876－77 年）のように両者を巧みに対立させながら、着実にその権益を拡大している。これに対抗してロシアとイスラーム諸国（オスマン帝国、イラン、アフガニスタン）が

政治、経済、軍事的な協約を結ぶと、情況はどう変わるだろうか。ロシアは無益な戦争に訴えることなく南方への進出路を確保し、一方のイスラーム諸国は列強の干渉に左右されることなく、ひたすら国内の復興・発展に取り組むことができる。ロシアとの経済格差は後者の経済を壊滅させるほどに大きくはない。この相互互恵の防衛的な協約は、ヨーロッパ列強の反発を招くにちがいないが、いまや紅海までも制したイギリスを前に、メッカとメディナの両聖地の守護すらおぼつかないイスラーム諸国には、とりわけ検討すべき選択肢なのである。」

５）『安寧の国のムスリム』（1906 年『テルジュマン』の付録として配布）

スペインのアルハンブラ宮殿を訪れたタシュケント人ムッラー・アッバースを主人公とするユートピア小説：ヨーロッパよりも先進的なムスリムの桃源郷

２．アブデュルレシト・イブラヒム（1857-1944）

イスラーム世界と日本を結んだ熱烈な汎イスラーム主義者・ジャーナリスト

1905 年ロシア革命以後のロシア・ムスリム政治運動の指導者：名声と挫折

日露戦争に勝利した日本への旅：日本と日本人の詳細な観察（1909 年 2 月－６月）

旅行記『イスラーム世界－日本におけるイスラームの普及』イスタンブル，1910 年

１）イブラヒムが親交を結んだ個人と団体

【個人】

政治家：伊藤博文、大隈重信、犬養毅、河野広中、佐々木安五郎、戸水寛人（貝湖）

アジア主義者：頭山満、内田良平、中野常太郎(天心)、黒龍会系の活動家

軍人・元軍人：福島安正、大原武慶

ジャーナリスト・評論家：徳富蘇峰、三宅雪嶺、梅原喜太郎、馬場恒吾

【団体】

徒歩主義同志会：1906 年 6 月 17 日創立。徒歩の励行を基本に健康や節約をめざす同好会で、富士登山や観桜会、懇話会、徒歩計の工夫などの活動をしていた。創立メンバーには、教育家の宮田修や田中弘之がならび、内藤鳴雪、三宅雪嶺らも参画。

東亜同文会：1898 年に結成されたアジア主義者の団体で、とくに日中間の善隣をうたった。民間の団体だが、外務省などからの資金供与を受けていた。上海に東亜同文書院、東京に東京同文書院を開設して、日中の留学生を対象とする高等教育を行った。

史談会：幕末維新史料の収集・編纂を目的として 1892 年に発足。イブラヒムの訪問当時は、大原重朝伯爵（1848-1918）が会長を務め、多数の各界名士が会員となっていた。

２）明治末の時代の空気

(1) 汎イスラーム主義とアジア主義の交錯

・アジアの盟主、ヨーロッパ・キリスト教世界への対抗心、固有の精神・伝統の保持

・イブラヒムは、旅行記の中で日本におけるイスラームの普及の可能性と重要性を強調した

のに対して、日本側は亡国の旅行家、しかし発展する日本をよく理解し、ヨーロッパに対抗してアジア諸民族の連合を実現するために奮闘する「韃靼の志士」と認識。

(2) アジア主義者との親交　→　アジア義会の結成

大原武慶（1865－1933)、中野常太郎（1866－1928)、中山逸三（東京外国語学校出身、イブラヒムのロシア語通訳)、頭山満(1855－1944)、河野広中(1849－1923)、犬養毅(1855－1932)、山田喜之助（1859－1913、ポーツマス講和に反対した対外強硬派の弁護士)、青柳勝敏（1879－1928　騎兵大尉退役後、中国革命、満蒙経営に関与)

(3) 日本陸軍とイブラヒム：参謀本部第二部長宇都宮太郎少将（1861－1922）の日記

「余の胸中にては、イブラヒムの人物素性も不明なれども、果たして出来そーならば、ファドリー等と共に他日回教徒操縦の道具に利用し、耶蘇教国と対抗の或る場合には利用し得る如く為し置かんとの考なり。」(1910 年 3 月 14 日)

3）イブラヒムの観察した東アジア

・釜山から北上する車中で亡国の朝鮮人青年との対話

・北京で中国ムスリム（回族）の指導者、王寛（王浩然　1848－1919）と面会

・北京のムスリム新聞『正宗愛国報』に論説「東洋は東洋人のために」を寄稿　→　資料(6)

4）戦争と革命の中のイブラヒム

・イスタンブルを拠点とした汎イスラーム主義のジャーナリスト

・第一次世界大戦中の工作・宣伝活動（ベルリン・ストックホルム)

ドイツ軍の捕虜となったロシア・ムスリム将兵　→　アジア大隊の編成　→　対英戦

・1917 年のロシア革命とイスラーム世界解放の可能性：

ソビエト・ロシアへの帰国と決別（1918-1923)

・トルコ革命の理念と汎イスラーム主義との相克：疎外されたイブラヒム（コンヤに蟄居)

5）再来日したイブラヒム（1933 年 11 月　－　1944 年 8 月）

・日本発のタタール語雑誌『新日本通報』に論説を寄稿

「アル・ジハード（聖戦)」1933 年 11 月号（執筆は来日前)

参考：1930 年代末から中国ムスリムは、抗日戦争を防衛ジハードと認識

・1938 年 5 月に落成した東京モスクのイマーム、亡命タタール人コミュニティの長老

・日本の対イスラーム政策への協力

大日本回教協会（1938 年)：「東亜新秩序の建設」と「３億を数えるムスリム諸民族」

南方向け宣撫映画『東京の回教徒』(1944 年）への出演

○明治末期から昭和 19 年に至る日本の近現代史との交錯：日本史を外から見る

参考文献：

アブデュルレシト・イブラヒム（小松香織・小松久男訳）『ジャポンヤ：イスラム系ロシア人の見た明治日本』第三書館、1991 年

臼杵陽「戦前日本の「回教徒問題」研究：回教圏研究所を中心として」岸本美緒編『東洋学の磁場』（岩波講座「帝国」日本の学知　３）岩波書店、2006 年

宇都宮太郎関係資料研究会編『日本陸軍とアジア政策１：陸軍大将宇都宮太郎日記』岩波書店、2007 年

小松久男『イブラヒム、日本への旅：ロシア・オスマン帝国・日本』刀水書房、2008 年

小松久男「汎イスラーム主義再考：ロシアとイスラーム世界」塩川伸明・小松久男・沼野充義編『ユーラシア世界　3　記憶とユートピア』東京大学出版会、2012 年

坂本勉「山岡光太郎のメッカ巡礼とアブデュルレシト・イブラヒム」池井優・坂本勉編『近代日本とトルコ世界』勁草書房、1999 年

司馬遼太郎ほか『司馬遼太郎歴史歓談』中央公論新社、2000 年

杉田英明『日本人の中東発見：逆遠近法のなかの比較文化史』東京大学出版会、1995 年

東洋大学アジア文化研究所・アジア地域研究センター（監修）『亜細亜義会機関誌『大東』（CD－ROM 版　Ver.1）：20 世紀アジア関係基本史料研究１』東洋大学アジア文化研究所・アジア地域研究センター、2008 年

松本ますみ「中国イスラーム新文化運動とナショナル・アイデンティティ」西村成雄編『現代中国の構造変容　3　ナショナリズム―歴史からの接近』東京大学出版会、2000 年

若林半『回教世界と日本』大日社、1937 年

資料篇

資料(1)「珍客隈伯を訪ふ」（イブラヒムの大隈伯爵訪問）

去る 12 日突如としてわが社を訪問せる露国ゝ民議会の前代議士レミツト、エブラシム氏は、昨朝大隈伯爵を訪うて其感想談を叩けり、氏はウラルの辺境に人となりマホメダンの有為なる頭目として露西亜に新文明を普及するに就きて熱心なる戦士なり、かつて此目的の為にエルフエツト新聞を発刊したるも発行禁止の命に逢い、国民議会に急進主義を鼓吹したる為め解散の厄に会い、露国守旧党の圧迫に堪えずして飄然世界徒歩旅行を企てたるものなるが、60 という頽齢にも似ず精悍剛健の意気躍如たり。老伯との握手を終るや否や、彼は言葉忙(せわ)しく露国政府の圧制を愁訴して曰く、

露国人 10 中の 6 は異人種にして純粋のスラヴは僅々(きんきん)7000 万人に満たず。然るに此スラヴ族が他の異人種を酷遇することは想像の外にあり。我等は政治上に於ても宗教上に於ても常に天賦の自由を奪われつゝある以外、更に人種血統の為めに人類として殊別の待遇を受けつゝあり。世に憐はれなるは亡国の民と聞くも殊に悲しむ可きは異人種に征服されたる異宗民族なり。日露曾(かつ)て干戈を交へたるもそは露国官僚の為す所にして我等は始終日本の勝利を冀(こいねが)うの外余念あらざりし。戦役の始まる 6 ヶ月以前、余は直接にクロパトキン将軍より預言されたることを記憶す、将軍曰く、余は一度東京を見舞へり、期年ならずして更に東京に入るの日は日本帝国の主権者と休戦の条約を訂結(ていけつ)して全露

国民の光栄を世界に輝すの日也と、然るに将軍の豪語は夢の如くに消えて、当時新聞にて伝えられたる苦言！露国は敗戦す可し。而して立憲政治を●ら得可しという閣下の預言は的中せり。（中略）エブラシム氏は間断なく質問を連発して談緒は劫々（なかなか）に盡（つ）きず。会談二時間、帰途早稲田大学を参観し再訪を約して辞し帰れり。

『報知新聞』1909 年 2 月 18 日

資料(2) 史談会におけるイブラヒムの演説（1909 年 3 月 20 日）

「回教管長の演説―韃靼人イブラヒム氏」

余等韃靼人が一度露国政府の配下に隷属することとなりてより茲（ここ）に 450 余年、其間露政府は日本を全く余等に紹介すること無かりし為め、余等は近年に至るまで殆（ほとん）ど日本の存在を知らざりき。最近日露戦争の起らんとするに至り、露国の新聞又は雑誌等により漸（ようや）く之を知るを得たるも、其伝ふる所は同時に土耳古（トルコ）新聞の記事と非常に相異あり。何（いず）れに信を置くべきか全く五里霧中に彷徨するの観ありしが、此度（このたび）日本に渡来して親しく其真情を見るを得たるは、余の愉快に堪へざる所。而（しか）も其真情の露国新聞の伝うる所は全く中傷的にして土耳古新聞の記事の公明なりしを知り得たるは、余の益々愉快に堪へざる所なり。余が日本漫遊の希望は随分昔よりの事なりしが、戦後露国の混乱したる事情は終（つい）に余の出発を今日まで延引すべく止むを得ざらしめたり。本日は史談会の席上なるを幸い、余は我韃靼の国情を述べて敬愛なる諸君の同情に訴えんと欲す。

抑々（そもそも）我祖先成吉汗（ジンギス・カン）の歴史は今更云ふを要せず。其後露国の侵略始まるや、時の露帝イワン、グルズニイは我等が祖先及び皇帝の一族を悉（ことごと）く虐殺し、二週間兵を放ちて家毎に大捜索を行わしめ、重要なる歴史は無論のこと、文学宗教に関する書籍に至るまで悉皆焚滅（しっかいふんめつ）せしむるに至れり〔モスクワ大公のイワン雷帝（在位 1533-84）によるカザン・ハン国征服のこと〕。爾来 250 年間我等は全く暗黒の世界に封鎖せられ自国の歴史すら知るに由なかりき。（中略）日露戦前後稍（やや）自由を得るに至りしも、猶（なお）学校の教育には干渉甚だしく、為に人材全く消滅の形となれり。

茲（ここ）に於いて余等の露国対する憤懣と憎悪とは一層激しく、遂に亜細亜合同の大希望を起こして、之を各人の肝に銘するに至れり。余等は最早表面の偽善をのみ看板として裏面の汚穢（おかい）極まりなき欧州より教育を受くるを欲せず、行く行くは日本に留学生を送る考えなり。若（も）し日本政府にして余等が此乞（このこい）を許されなば、余の幸福は実に之に過ぎず、歴史は実に重要なり。余等は 450 年自国の歴史を知る能わず、其が為め自国の独立或は改革に対し不便を感ずること極めて大なり。日本が最近 50 年間に世界を驚かす長足の進歩を遂げたるも、余の考へにては是（これ）皆（みな）其歴史の古来明瞭となり居れる賜なりと思う。余は出来得る限り詳細に日本を観察せんが為日本に来れり。余の日本紀行は土耳古（トルコ）、亜剌比亜（アラビア）、土耳機斯坦（トルキスタン）の三新聞に通信せり。露国新聞にも通信したれども掲載如何は知る能（あた）わず。現に余は数週前余が日本観を掛引（かけひき）なく哈爾寳（ハルビン）新報に通信したるも、同紙は之を悉（ことごと）く抹殺したり云々。

『朝日新聞』1909 年 3 月 22 日

資料（3）4月18日徒歩主義同志会大演説会でのイブラヒムの講演要旨

「露国前代議士の日本崇拝」

▲奈翁（(ナパレタン)は価値なし　世界は奈翁を以て千古の英傑と崇拝すれども奈翁が嘗つて戦争の三条件は第一金第二金第三金と言つた事は今日日本人特有の大和魂を陣頭に建てゝ戦わんとするに比しては到底比較問題にならぬ譫言（うわごと）であるとしか想はれない。其点に対しては欧米を蹂躙したるチムール種が戦争の秘訣は九迄は精神で一は武器であると豪語したるに対して奈翁の言は一文の価値も無いものである、余は亜細亜人の一人として日本国民諸氏に望む處は欧米の文明を模すると共に精神をも模する勿れと云ふ事である、日本人が大和魂を失つた時は曾て世界を蹂躙したる土耳其（トルコ）人が今日世界最弱者として各国より軽蔑さるゝが如き境遇に至る時であろうと思ふ。

▲日本人は亜細亜人の代表者　重ねて望む處は日本は其文明を欧米に模するは決して悪い事ではないが、其精神迄輸入して特有の大和魂を失つては宜けない。欧米は幾多の国費を投じて送る宣教師は決して無意味なものではない。平時国事探偵であるから充分注意して永久日本人の特色たる武士道の精神を保守せられん事を望む。日本人の発展は亜細亜人の発展である。亜細亜人の発展は即ち露国の属国たる我韃靼人が建国の機熟したる時である。吾人は只日本人に信頼するのみ。日本人は此後の亜細亜人を代表するに適したる帝国なりと確く信ずる云々。　『報知新聞』1909年4月19日

資料（4）史談会速記録に見えるイブラヒムの演説（1909年４月24日）

ご挨拶は抜きにしまして、ごく簡単にいたします。自分がロシアにおります時分、ロシアの新聞雑誌に依りまして、日本といふものを知りましたが、芸者及人力車といふ事のほかは、あまり紹介しませぬから知りませぬ。ただ今は以前の感想とまるで違いましてございます。日本国民の大和魂を大いに鼓吹しましたのは、仏教が大いに功があったと思います。仏教は印度から支那を経てなお朝鮮を経て来ましたけれども、日本の仏教は印度の仏教と違って国体に適したるところの日本的仏教、すなわち日本の宗教ということを言ってもさしつかえないと思います。（拍手）

自分は日本へ参りまして、わずかに三カ月でありますけれども、その間日本の歴史を研究しまして、日本はいかなる多くの金銀をもっても買うことのできない大和魂というものがあるということを今度日本に参ってわかりました。大和魂というものがあれば欧州以上に進歩して欧州を凌ぐごとき強国となることが必ずできることを自分は信じて疑いませぬ。ただ少しく自分が心配しますのは、東京、横浜、大阪、神戸のような外国人の多い所と、多くない所とでは精神が違います。大阪、神戸などは人間が欧化してしまって、日本純粋の日本的精神がないのであります。すなわち日本の国家を滅ぼすものは社会主義でなく外教でなくしてすなわち大和魂を失ったハイカラであろうと自分は信じます。（喝采）

自分は今度日本へ参って非常に感じましたのは伯爵閣下のごとき貴族の方あるいは商人あるいは農夫もかくのごとく階級の非常に差違あるにかかわらず、平等にすべてご交際になるということは自分に大なる感動を与えました。ロシアはむろんのこと欧州至るところ貴族と平民と懸隔が非常に違ってとても一所に並んで坐ることはできぬ、並んで坐ることは大なる恥辱と思っているか知りませぬが、日本に来ては高貴な方でも高貴でない方も同じになっているのは、非常に喜んでおります。はなはだ大なる感動を与えました。（拍手）

かくのごとく日本が国民的精神を今後二〇年維持しておられたならば、必ずヨーロッパを凌ぐの力を有するだろうと自分は信じております。（拍手）太陽は東から出ます。すなわち日本の方角から太陽は昇りまして西へ没するのでありますから、近い将来において日本は太陽のごとく全世界を輝かすだろうと自分は考えております。太陽は西へ没しますから、欧州は近き将来において太陽の西没するごとくなると思います。自分は日本を先生と仰ぎ、かつまた日本を非常に尊敬しておりますから、どうかアジア人を教育していただきたいのが自分の目的でございまして、将来アジアを同盟結合することに是非ご尽力を願いたいというのが自分の希望でございます。（拍手）ただいま申し上げたことは肺肝から申し上げたことでございます。（喝采）

『史談速記録』第 195 輯、史談会創立 20 年紀年会記事、1909 年 5 月、33－35 頁

資料（5）「韃靼の志士イブラヒムと語る―アジア民族統一の絶叫」

昨今外客の来遊する者がとみにふえた。中にはずいぶん珍客もある。なかんずくこの頃滞留しているイブラヒム氏のごときは、けだし珍の珍なるものといってよい、伝える所によれば氏は、一時源九郎義経の後身などと称えられた蒙古の怪傑ジンギスカンの後裔であって、今の名は在露都の回々教管長という出世間の身であるが、じつはアジア民族の統一を期そうという大抱負のある韃靼の志士であるそうだ。（中略）たまたま日露戦争によって極東に日本という強国のあることを知り、これを擁してアジア民族の盟主に立て、もって多年の怨恨を晴らすにしくはない。それで身自ら同国に遊んで親しく其の風物に接しこの意見を披瀝してこようというのが、じつに志士イブラヒム氏を起たせてその足を東方に向けさせた動機であるとか。

すでにアジア民族の統一をもって理想とする氏のことであるから、その談がアジアの文物を挙げてヨーロッパの文明を貶す傾のあるのは、むしろ怪しむに足りない。しかしその熱烈にして真摯なる調子は、一面東洋的な粗大な議論を免れないが、どこかに人身をひきつける力があって耳新しく感じさせるところがある。氏は往昔回教の高僧が遺したという金言「なんじ学識を得よ、アラビアにおいてこれをえよ、もしここに得ずんば支那において得よ、なおここに得ずんばその付近において得よ、しかしてこれらの那辺にも得ずんば天において求めよ」を前提として、今は欧米の文明が世界を支配しているが、元来文明の源泉はアジアにあってしかも彼らのものとは比較にならない根底のあるものであることを忘れてはならない。欧米の文明は皮層の文明である。玩具に類した文明である。こんな文明がどうして長く続くものか。最後の勝利は根底のある精神的の文明を待つ民族の手によって占められるはずだ。日本が露国に捷(か)ったのはじつにこれを證明しているではないか。何を苦しんで日本人はその制度にその風俗に彼らを学ぼうとするのか。われわれが頼む盟主日本の人民は少なくとも本を忘れて末に走らぬようにしてもらいたい。婦人なども決してコルセットで造る西洋婦人の洋服姿などを学んではならない。第一束髪などはやめてやっぱり国振りの髷に結うがよい。（中略）

志士イブラヒム氏が語るところは、あまりにも大胆であってやや粗大の嫌いがある。しかし氏が大陸の産であって、緻密な科学的修練を経ていない東洋人種であることを考えてみれば、これらの非難はむしろ評者の豆大な度量を現わすにすぎないかもしれない。とにかく記者はこの亡国の民が説く悲歌慷慨の声裡に一種沈痛の気が溢れていることを感じて、そぞろに寒心を禁じ得ない心地のされるとともに、日本国民

が将来にになう義務の少なからぬを覚えた。聞くならく氏は旬日を出でない内に東京を発足して、徒歩支那、西蔵を巡遊し、中央アジアを経てトルコに入り回教の本山に詣でて帰国するというのであるが、山河幾千里切にその健康を祈るのである。（一記者）　　『週刊サンデー』24 号、1909 年 5 月 9 日、14 頁

資料（6）北京のムスリム新聞『正宗愛国報』に寄稿したという論説「東洋は東洋人のために」からの抜粋

今日、誰もが目を見開き、あたりを今一度見渡して見れば、驚くこと必定である。今日、われらの家たる東洋は、ヨーロッパ人の侵略にさらされている。強盗がわが家を襲い、財産を盗んでいるというのに、われわれは訳をしらない。何百年というもの、ヨーロッパ人は彼らの生活と浪費の糧をわれわれの国から調達し、この世にどれほど腐食し、役に立たず、無益なことがあろうと、これみな自国からもたらしたのである。われらの無知と怠慢、無力を利用して、彼らはこれらをわれらに負わせ、われらの財産や資産、生産物など何であれ、みな奪い去り、それでも満足しなければ、軍事力をもって、大砲や小銃で武装してやってきて、破壊し、火を放ち、何万という生命、祖国の子らを赤い血に染めるのである。それから、お前たちに勝ったぞと言って戦争の賠償金を求める。まるで、われわれが〔戦争を〕招いたかのように、戦争をしかけたかのように、われわれを断罪し、莫大な金をもってしても償えない負債を負わせるのである。われわれの国を略奪し、何もかも奪う。われわれが自分の家で自営することにも容赦はしない。何百年来というものアジア全土の民族を悲嘆に暮れさせ、とどのつまり従属を強いるのである。

今日インドの状況はいかに、トルキスタンはどんな有様か、これを念頭に置いて全アジアの未来を考えてみるならば、知らねばならない、確信しなければならないことがある。やがて東洋の民族はすべて西洋人への従属によってつぶされ、われわれはすべて彼らの浪費と安楽のために奉仕することになるだろう。ロシアは今やトルキスタンを併呑し、モンゴルも呑みこもうとしている。中国領トルキスタンはロシア人垂涎の地である。チベットはイギリスが占領し、トンキンはフランス領となる。これはすべて地図上で分割されている。近東とイランもしかり。分割案はすっかり出来上がっており、実行のための機会が検討されているところでる。

西洋の政治的な野望とは、東洋諸民族の死滅によって自己の生存を確保することにある。どこの国でも最初は正義の幕をたらして、わが東洋人を欺き、やがて目的を達成すると、われらを従属させても正義の一言も語らず、人道のかけらも見えないのである。1900 年ブラゴヴェシチェンスクで［ロシア兵が］無辜の中国人を河に投げ込むという事件があったが、このときは少年や少女、さらには妊婦や乳飲み子を抱いた女性に至るまで子供たちと一緒に一まとめにしてはアムール河に投じ、河面には３キロメートルにわたって遺体の橋ができてしまった。これみな自分たちの目でみたことだが、これ以外にも数多くの惨事を必ずや見ることになるだろう。われわれが目撃せずとも、子供たちが見るだろう。われわれは今からしっかりと知っておかねばならないことがある。このような災厄から自分たちを守るための方策を考えておかなくてはいけない。いずれ黄色人種の灰は空に散るという彼らの計画はすっかり出来上がっている。いささかなりとも思慮のある者がこれを熟慮すれば、目撃することになるだろう。それでも、東洋の諸民族は自分たちの生命、自分自身を守ることができる。西洋人がわれらに慈悲をかけることはない、慈悲をかけられるのはわれわれのみ。われわれの敵は、われわれに対してすっかり連合しており、いつ何時東洋に問題が起きようと、みな一致して行動に移る。一心同体となるのである。われわれも少なくとも敵に対抗して

合法的な権利を守ることができるよう、連合の盟約を交わさなくてはならない。われわれの生存をはかるための唯一の方法があるとすれば、それはこの連合の盟約であり、ほかに方途はない。東洋人の生存は、東洋の統一によって確保できるのであり、他の方法はありえない。

今日東洋から上がった太陽、すなわち日本は、今から 50 年前 300 を越える侯国〔の集まり〕だったときは、朝鮮におびえていたのだが、いつの間にかこれを支援し、一体となった。世界の大国ロシアを打ち負かし、朝鮮と満洲に勢力を扶植した後、数年をかけて自国を外国の妨害から解き放した。これは小さな国が一つにまとまったおかげでできたことである。日本人は東洋のもっとも小さな民族であるとおり、もっとも小さな部分である。

東洋の統一ほどの重要な問題は、ひとり東洋のみならず西洋の生存にとっても必要なことである。なぜなら現今の西洋の侵略行為が続くならば、いつか全東洋を決起させるが時が訪れる。それはかの十字軍の戦禍よりもはるかにひどい惨禍をもたらすだろう。かくして東洋の統一は西洋の生存をも確保するのである。なぜなら、もはや西洋の侵略行為は容認しないからである。

東洋統一の決議と綱領は時が準備するだろう。　　『イスラーム世界』第 1 巻、542－543 頁